



## クレマンさんの庭を訪問したときの話

澤崎 賢一（監督）

パリのオステルリッツ駅から南に 3 時間ほど電車で揺られ、サン・セバスチャン駅にひとり降り立ったのは正午前だった。ほとんど人影の見られない小さな田舎駅だった。灰色の雲がどんよりと低く垂れ込め、ぼらぼらと小雨の降る肌寒いなか、最小限の撮影機材を詰め込んだカメラバッグを背負って、僕は少々不安げに周囲をキョロキョロしていたに違いない、と振り返ってみて思う。幸いすぐにポロポロの自動車の傍らに立つクレマンさんの笑顔を見つめることができた。講演会のために初めて来日した彼と日本で会ったときから約半年が過ぎていた。

クレマンさんの運転は、予想に反して、というかあまり彼が運転をする場面を想像していなかったのだが、少々荒っぽく、迷いなくまっすぐに彼の自宅に向かっていった。車中では、最近の彼の関心について話をしてくれた。なくしていたブーツが最近、庭で見つかったらしく、そのブーツに植物が覆い茂っているのを彼がいたく気に入って、それを玄関に飾っているという話だった。それは人と植物のデザインの融合とでも言える代物だろうか。

右に左に、と蛇行しつつ過ぎ去る景色を眺めているうちに、車がいまどこを走っているのがわからなくなってしまった。しばらくすると、いつの間にかやら森に囲まれた小道に迷い込んでいて、車が通るには少々荒い地面に揺られながら、ようやくクレマンさんの暮らす自宅に辿り着いた。目の前には「動いている庭」が広がっていた。ひときわ背の高い桂の木が「谷の庭」にそびえ立っている姿や、庭には不釣り合いに巨大な葉を茂らせる南米の植物などが最初に視界に入ってきて、彼が日本の講演で紹介していた幹が倒れたまま成長を続けるリンゴの木や「動いている庭」の始まりの象徴であるハナウドはどこにあるだろう、などと庭を眺めた。

つる植物が壁面を覆う石造りの家はかわいらしく、庭と溶け合うようであり、同時に存在感たっぷり大地に座していた。1階にはキッチンと食卓、古い暖炉のあるリビングがあって、薪が玄関横の壁一面に積み上げられていた。2階に上がると、彼の仕事場であるデスクとソファのある部屋に通され、今夜はここに泊まって構わないと案内してくれる。自前の電気をムダにしないように、普段はインターネットのルーター電源は切っているらしい。もしネットを利用したければ、スイッチを入れて利用してくれ、と説明される。僕はともかく、すぐに撮影ができるようにカメラのセッティングを開始した。大きなガラス戸の向こう側には、雨粒の混じった風が優しく吹きつけていた。

劇作家のナデージュさんが自作の取材のためにクレマンさんに会いに来ることを、到着後ほどなくしてクレマンさんから告げられた。図らずも、彼女は映画の中に少し登場することになった。彼の庭には、年間を通じて多くの訪問者があるのだ。ナデージュさんの到着を待つあいだ、彼は自ら昼食を用意してくれた。オムレツのような郷土料理で、食材のほとんどは彼の庭の片隅にある畑で採れたものと言う。僕はこのときからすでにカメラを回していたが、彼は寛容にも、僕が撮りたいものを好きなだけ撮るとよいと言った。僕は



不躰にも寝室や風呂場やトイレにまでカメラを持ち込んで撮影を続けた。すると唐突に彼は、庭を案内するからついて来るか?と僕に声をかけた。雨がちらつく空を睨みつつ、機材の防水対策も不十分なまま、そそくさと彼の後を追った。

このとき、映画をどのように構成するかは僕の頭の中になかったが、できるだけロング・ショットで僕がクレマンさんと過ごす時間をカメラにおさめることに努めた。そして、彼が丁寧に庭を説明する様子を1時間半ほどかけて撮影した。日本での少し遠慮がちにも映った彼とは違い、庭を豊饒と歩いて回る後ろ姿は、とても雄弁で確信に満ちていた。おそらく、もう何度も色んな訪問者に対して庭について説明してきたであろうにもかかわらず、彼がとても楽しそうに話をしてるのが印象的だった。このとき、僕は録画ボタンをたぶん2度ほどしか押していないので、庭を回るあいだずっと撮影を続けていたことになる。映画を構成している中心となる映像は、このときのものだ。

僕がクレマンさんの庭を訪れたのは8月中旬頃だったが、雨の降る夜はとても寒く、彼は暖炉に火をくべ始めていた。パチパチとはぜる薪の音が心地よかった。夜、僕はあえてカメラを回すことをやめた。現場にひとりで入ることのメリットのひとつは、被写体との距離感がとても親密なものになることだと思うが、同時に会話をすることの難しさも生じる。



ゆえに、いつカメラを回し、いつカメラを止めるかの判断は、慎重に行わなければならない。僕はカメラを置いて、彼とじっくりと話をしたかった。

クレマンさんは、一体どんな映像を作りたいのか、と僕に尋ねた。僕は、映像には独自の時間が流れているんじゃないだろうかと感じている。僕たちが日々暮らす生活の中に流れる時間とは異なる時間。すぐれた映像作品は、映像の中で流れる時間に自らが生きているかのように感じさせる。それは決して物語に身をまかせる行為ではなく、自らの意思で選択し、感じ、呼吸をする時間の流れなのだ。僕は映像によって、そんな生きている時間の流れを生み出したい。

それから、クレマンさんが日本を訪れたときの話、彼の生まれ育った街の話、戦争やエネルギー問題についても話をした。70歳を超える彼は、今後は仕事の量を減らして、より重要だと思われることを積極的に引き受けたい、といった話をしていた。にもかかわらず、こうやって僕のために時間を費やしてくれていることが嬉しかった。そうやって夜もふけ寝床につこうかという頃、ふと気づいたときの夜の深さに僕はとても驚いた。いつの間にか雨は止んでいた。

翌朝、クレマンさんは、午前中にはジュネーブに向かわなければならず、僕も彼と一緒にパリまで戻る予定になっていた。日が昇るとともに庭の各所を撮影していた僕の背中に彼の声が響く。時間ももっと欲しかった。もっと撮影したかった。「動いている庭」。いつも多様な表情で人々を迎え入れるであろうこの庭への再訪を僕は心に誓い、彼にまた来たいとお願いして庭に別れを告げた。動植物や昆虫などの共生を大切に作る彼の庭は、思想的にも多くの示唆に富んでいる。しかし彼の庭を訪れて感じたことは、なんというか、もっと直接的で、心に突き刺さるものだった。僕は願わくば、彼がどのような日常生活を送り、どのように彼の庭が表情を変化させていくのかを、今後も記録したいと思っている。そしてまた別の機会に、みなさんに映像を紹介し、みなさんと共に映像の時間を呼吸したい。

